

# 玩具と帝国——趣味家集団の通信ネットワークと植民地

鈴木文子

〔抄録〕

明治時代に始まる「趣味家」といわれるコレクターは、日露戦役の記念絵葉書ブームを経て、大正以降、一般大衆へ広がっていく。また、彼らの趣味蒐集の触手は、時代の趨勢のなか自然に植民地へも伸びていく。本稿では、これまであまり注目されることがなかった趣味家たち、特にその代表的存在である郷土玩具の蒐集家と植民地の関係を考察することにある。趣味家たちは、複数の趣味家集団に属し、自作の版画を交えた多くの同人誌を作成し、また、絵葉書等でさまざまな情報を交換していた。彼らの通信文化を分析しながら、ジャーナリズムとは異なる形で一般の人々に流布していた植民地の風景を考察する。

キーワード 趣味家、植民地観、朝鮮、通信文化、郷土玩具

## 1. はじめに

明治40年ごろから趣味という言葉が雑誌にあらわれ、その後「趣味家」といわれるコレクターたちが徐々に世間に認知されるようになる。何かを蒐集するという好事家は江戸時代にも存在していたが、1880（明治13）年に結成された「竹馬会」といわれる同好会は、趣味家集団の先駆として著名である。彼らは、開国とともに流入してきたブリキやセルロイド製の海外玩具に対し、土や紙でできた玩具に郷愁をいだき（斉藤1971：24-25）、のちに「郷土玩具」として差別化される品々を愛好していく。玩具蒐集に代表される趣味家たちは、世界との出会いによって、あるいは近代、都市化というあらたな時代の潮流のなかで、幼い時代の風景をさまざまな品物のなかにも求めた人々でもある。一方、日露戦争以降の絵葉書ブームが、あらたな趣味家たちを作り出し、第一次大戦後、その階層も大店の主人から一般大衆へと裾野を広げていく。また、日本帝国の成立という時代背景のなかで、その蒐集品も植民地へと拡大していく。本稿では、大正期より一大ネットワークを形成してきた趣味家集団、特にその代表的集団である郷土玩具蒐集家たちに焦点をあて、彼らの蒐集のプロセスのなかで、交換されていた朝鮮等の植

民地情報や、その情報経路のひとつである当時の通信文化を分析し、庶民のなかに流布していた植民地の風景の一段面を考察することにある。

これまで趣味家をめぐる研究は、人類学での『創られた伝統』や Writing Culture の影響を受け、民俗学における既存の研究対象や思考の再検討、特に「郷土」概念の再考、フォークロリズムの研究として近年いくつかの論放が出されている。三越百貨店の通信誌の分析から、黎明期の「郷土玩具」に対する「郷愁」といったまなざしがいかに創造されてきたかを考察した小川（1997）や、小川に先行し、同じく明治以降に形成されてきた「趣味」という観念を演出していく三越を分析した神野（1993）の著作がある。草創期の趣味家たちが、百貨店の企業戦略に加わりながら、博覧会や展覧会を通じ、こども文化や流行の演出、創造者の一翼を担った存在であったことを著した。また、「郷土」という言葉が昭和の初めに定着するなか、分裂していく玩具蒐集家と民俗学者の関係から、両者における「郷土」観の異同を香川（2003、2006）は考察している。その志向は、植民地をとらえる彼らのまなざしを考える上でも興味深い。山口昌男（2001）は、そのスタンスが若干異なり、明治以降の官民を超越した趣味家たちと知のネットワークを描いている。筆者の関心は、このように広がるネットワークがどのように植民地情報を伝えていたかという点にある。

本稿では、著名な趣味家のネットワークの一端に位置し、山口（2001）の著作のなかでも取りあげられている鳥取県出身の板祐生（1889～1956）の蒐集品や、趣味家たちによる通信、同人誌等を手がかりに、ジャーナリズムとは異なる形で、庶民の視線の中にあつた植民地や海外の情報を検討し、明治から終戦までのその変化の様相や特徴について言及する。以下に示すように、板祐生コレクション（「祐生出会いの館」所蔵）は、多種多様な明治以降のコレクターの様態を今日推察できる、筆者が現在知る限りでは唯一の存在であり、また、その中で多く残されている趣味家たちの通信誌は、庶民と植民地の関係を考察する一助となると考えるからである<sup>(1)</sup>。

## 2. 板祐生（1889－1956）と帝国コレクション

鳥取県の山村で、長年尋常小学校教員を務めた板祐生は、風俗絵葉書、ポスター、商標、箸袋、かけ紙などあらゆる「ガラクタ」を集めることで周囲に知られていた。日露戦争時にはすでに蒐集の世界に入っていた彼は、1918（大正7）年ごろより、児童文学の泰斗で黎明期のコレクター巖谷小波や、大阪の趣味家川崎巨泉などと知り合い、さまざまな趣味家や趣味家集団との交流を深めていく。彼が出した趣味の通信誌のうち、特に郷土玩具に関する私家本は、代表的な玩具文献蒐集家の川口栄三による『郷土玩具文献解題』（1966）の戦前編にも4種掲載されており、その世界でも認知された存在であったことがわかる。

板祐生のコレクションについては、拙稿で紹介したことがあり（鈴木2007）、ここでは簡単

に要約を述べるが、そのコレクションには国内ばかりでなく、「外地」といわれた当時の植民地や「満州」、統治領であった南洋諸島など「帝国コレクション」ともいえる、帝国日本の海外侵攻の軌跡を反映する蒐集品も多々含まれている。膨大なコレクションであるため、朝鮮のものに限定して紹介しておく以下のような種類がある。

ひとつは、絵葉書(約130枚)で、日露戦争以来日本で流行した写真絵葉書の類である。朝鮮総督府発行の「総督府始政記念」シリーズから、書籍、文房具店発行の風俗絵葉書、学校など各種団体が発行している記念絵葉書などもある。また、今日では貴重なポスター類。最も多いのは約300枚の満州関連品であるが、そのほか1929年に慶福宮で開催された朝鮮博覧会や、朝鮮・満州経路の旅客船ポスターもある。「朝鮮旅行案内」(1915、満鉄鮮満案内所発行)、「金剛山」(1939、朝鮮鉄道発行)などの旅行案内、汽車などの切符、珍しいものでは、白樺の木皮に風景が描かれ、手紙として送付できる観光地の土産物などもある。また、今日ではほとんどその存在が忘れられている朝鮮玩具約30点も特徴的である。

「帝国コレクション」の特徴は、その送付者の半数近くが、中国や朝鮮へ出征あるいは移住した地域住民であることだ。つまり、これらが趣味家だけが入手できた特殊な品々ではなく、当時の人々にとっては資金や関心さえあれば取得可能な手近な存在であったという点が重要である(鈴木前掲書)。地域住民たちは、祐生の依頼で、あるいは日常彼の蒐集癖を見聞することで、コレクションを送付していたことが、残されている書簡や私家本などから明らかになっている。一方、郷土玩具に関しては、同じ趣味家仲間からの送付が多い。

### 3. 朝鮮玩具の流通

#### 1) 朝鮮玩具

以下では、特に特徴的な朝鮮玩具がどのように蒐集されてきたかに焦点をあて、植民地と趣味家の関係を検討してみる。

「鮮玩」とよばれていた「朝鮮玩具」は、愛好家が扱うその定義は広く、かならずしも「郷土人形」をさすものではない。子どもたちが韓服にポケットのようにつける小袋、「チュモニ」や「堂函」という化粧箱、書堂(朝鮮式寺子屋)で朗読の回数を記録したという「書算」なども含まれている。今日の玩具愛好家にも継承されているという、「郷土玩具」というあいまいで茫漠とした定義は(小川2000)、「鮮玩」でも同様であった。「童心」をそそる、「その土地らしさ」が郷土玩具の基準であるが、朝鮮において、それは珍しさ、「特異さ」でもあった。西澤笛畝は、1937年のエッセイで日本からの観光客が増加するなか、彼らが「(朝鮮)特有の人形玩具を要望するために」、「朝鮮人制作者も、内在している特有の感覚と伝説や形式、色彩といったものを思い出して、だんだん面白いもの、変わったものが作られるようになってきた」とし(『土偶志』第3期1号・1937年1月号、以下『土偶志』3-1・1937.1のように記す)、日本

人のまなざしに対し、「朝鮮らしさ」を演出していく当時の制作側の状況を記している。

代表的なものは、「チャンスン」「將軍標」といわれるムラの道祖神をかたどった人形である。天下大將軍、地下女將軍が一組になっているものもあり、戦前最もよく知られていた朝鮮玩具のモチーフである。1930年代、埼玉県飯能郡の高麗神社ではそれを逆輸入し護符として販売し（拙1972：7）、当地の郷土玩具として事典にも掲載されている（西沢1964：69）。内鮮一体の時期と呼ぶのか、正確な導入年が不明なためわからないが、朝鮮観に関する興味深い例でもある。また、今日その名称が民間信仰においても、あるいは学術書でもみあたらない「福神」というモチーフがある。頭の上に毛がついていて、ユーモラスな鬼のような形相である。木彫が多いが「祐生」に残されているものには鮮やかな青色の張り子もある。おそらく趣味家の解説から想像すると、トリックスター的な両義性を持ち、悪戯の代償として幸福をもたらすといわれる「トッケビ」をイメージ化したもののように思われる。トッケビが、現代では角をはやした「鬼」の姿で韓国の童話などに描かれるのは、植民地時代の日本の鬼のイメージの影響ともいわれる（金宗大2003）。しかし、昭和の前半に趣味家たちの間で流通していた「鬼」の面は、人間のように耳があり、角がなく、日本人好みであったとしても、「郷土らしさ」を求める玩具人の中では、地元イメージがある程度忠実に描かれていたのではないかと思われる。「鮮玩」は今日、日本人の人形として無視されているが、かつての民俗のイメージを知る上でも興味深い資料もある。その他、日本の追儼神と類似した「方相氏」や「<sup>ヘッテ</sup>海蛇」といわれ、虎の張り子によく似た風貌で、赤の斑点にみどりの炎を身体につけた火伏せの神もある。光化門の前にあり、狛犬のような風体の伝説上の動物である。

しかし、現在明らかとなっている朝鮮玩具を保有している博物館からみると、ほとんど同じようなものを所有しており、残存しているものに限っていえば、当時の物品にはあまりバリエーションがない。生産が限られていたことが、一つの要因と考えられる。

## 2) 戦前の出版物と朝鮮玩具集

それでは、戦前朝鮮半島の玩具は、趣味家たちの間では、どのように流通し、認識されていたのであろうか。まず、1945年までの玩具集にあらわれる朝鮮玩具を追ってみると以下のようになる。

朝鮮玩具の目録として最初に作成されたのが、当時京城帝国大学の法文学部助教授、田中梅吉の「朝鮮玩具目録」（1926）である。田中によると、総督府からの依頼を受けて調査したものをまとめたものである。後日の玩具集には、「郷土玩具」として製品化され、販売されていた玩具が多いが、田中のものは当時子どもたちが直接使用していた手作りの素朴な遊具類が大半を占めている。日頃目にしてきたものを選択したとして、89種を紹介しているが、その中には、のちに定番となる將軍標、福神、ヘッテ、方相氏などは含まれていない。自らが作成した目録に、「既成品をのみ玩具と見る吾々内地人には、聊か異様に思はれるやうな一時的な手

製にかかる玩弄物が多い」理由を、既製品の玩具が乏しい朝鮮では、範囲を拓げないとほとんど蒐集不可能なためとしている（田中1926：185）。

4年後、武井武雄が『日本郷土玩具西の部』（1930）を上梓し日本各地の玩具を紹介するなか、植民地である朝鮮玩具の項目を設けている。田中の目録には若干の挿絵のみであったが、同書は10種ほどの写真を掲載している。ここで、「併合後の新作諸玩」として上記のヘッテ以外の玩具が掲載されている。また、將軍標の解説では、他の新玩同様併合後に「内地人」によって作成されたもので、当時男は地下女將軍、女は天下大將軍を持ってば守りになると「勝手な御利益まで案出」されていたという記述（武井1930）や、朝鮮版「姉様人形」、「新婦」（後には「閨氏」と記述されるのが一般的）は、（靈魂が宿るとして人形を嫌う朝鮮では）遊んだその日に捨て、持っているとき黍の芯で削った髪の毛から、血が滲むという迷信があるなど、今日あまり記録には残っていない民俗に関する記述がある。ただし、その言説の源泉については辿ることができない。

次に出されるのが、尾崎清次による『朝鮮玩具図譜』（1934）である。愛知県出身で小児科医である尾崎は、これ以前に日本の玩具図譜をやはり出しているが、1929年、直接朝鮮へ蒐集旅行にでかけ出版している。彼の収集は、1930年頃にはすでに終了していたともいわれ（井上1998）、その中には、祐生コレクションには現物がない、「兀童起」といわれた起き上がりこぼしの風俗人形があり貴重である。彼の著書では、玩具一点、一点に詳しい解説がつけられている。解説には参考文献がつけられ客観的な判断が下せる資料となっている。また、のちの清永の所持品では張り子として製造されている鳥が、「素麵粉」を原料としており、昭和10年代にはすでに入手困難となった貴重品が掲載されている。その後、元博文館の編集者で、著名な版画誌『白と黒』、『版芸術』の発行者、自らも版画家である料治熊太が、1936年『版芸術』8月号で「朝鮮土俗玩具集」として10頁ほどであるが、朝鮮玩具を特集している。

釜山玩具同好会の主催者、この中では唯一の朝鮮居住者である清永完治は、1935年から発行している同好会誌『土偶志』で、日本の郷土玩具とともに、度々朝鮮玩具を紹介している。1939年には、その臨時号で「朝鮮の郷土玩具」を、1943年には有坂與太郎監修のシリーズ「民族玩具叢書」第9巻として『乃留毛隨攷』を出版している。前者は、1939年に釜山放送局でラジオ放送した原稿である。次節で詳述するが、武井および、尾崎以外は、ほとんどが朝鮮玩具蒐集では渡朝の際、清永のもとを訪問し援助を得ている。また、その間、京都の蒐集家拙健之助による『朝鮮玩具図』（1941）が出されている。葉書版の版画14図と解説が施されているもので、趣味家たちに配布されていたのかは不明である。スケッチ的なものであり、戦後朝鮮玩具についていくつかの文章を残している同氏だが、初期のもので、後日の資料と比較し注目すべきものは見あたらない。氏の追悼特集に収められた随筆によれば、氏は先の武井の著書に刺激され、1932～33年頃、本格的に蒐集を始めたとある（拙1991）。この追悼集には、1936年4月と1941年6月に朝鮮へ出かけたことが書かれている。特に後者では20日近く滞在し、清永や

朝鮮の玩友たちと交流している。

以上のものは、単著や特集として上梓されているものであるが、そのほかの玩具集にもそれ以前から朝鮮玩具は登場している。管見では、『うなるの友』（1892年創刊）が、その第7編（1917）で天下大將軍と韓服姿の男性の木彫および振鼓の3点を掲載しているのが、最初ではないかと思われる。同書は、玩具の神様といわれた清水晴風によって玩具愛好趣味を一般にしらした書であり、上掲書は晴風亡き後、続巻を引き継いだ西沢笛敵によるものである。また、外国玩具を主としてとりあげ、その世界では知られた山内神斧の玩具集『寿寿』III-1に掲載された1920年の「朝鮮のチゲ將軍」（木彫り）や、「起き上が里」3点（張子：韓服の子を背負う人、婦人、動物）が次につづくものである。前者は、いわゆる將軍標である。それ以前、淡島寒月による『おもちゃ百種』（1916）による肉筆画集は、外国玩具を紹介したものとしては『寿寿』（第1篇は1914年発行）に次ぐものであるが、4割ほどを占める外国玩具のなかに朝鮮のものは含まれていない。また、川崎巨泉による『郷土趣味』の第5号（1918年6月）の裏表紙には、村落にある実物の「天下大將軍」の写真が掲載されているが、玩具についての言及はない。これらのことから、日本人のなかで朝鮮玩具が流通しだしたのは、1917年前後であったのではないかと思われる。ただし、1910年に三越百貨店の「児童玩具研究会事務室」には、「米・英・独・露を初めとして支那・朝鮮・南洋に至るまで世界中の玩具が陳列されていた」という<sup>(2)</sup>。どのような玩具であったかは不明だが、時期的に一般の流通にはいたっていない時代のものである。

### 3) 入手先

これらの玩具はどのように入手されたのであろうか。各図譜などには、ほとんど言及されていないため、知りえる資料は極少数であるが、彼らの通信誌から抽出してみると、いくつかの経路が読み取れる。祐生コレクションにある將軍標は、満州在住の同郷の軍人、H. S. が1925年大連勸業博覧会を見学した際、入手し送付してきたことが祐生の私家本に書かれている（板1925）。また、先の清永完治の『土偶志』に掲載されたエッセーには、朝鮮居住者でさえその入手が困難である様が伺える。ほとんどの入手先は、百貨店か、日本人相手と思われる土産物屋である。ペンネーム「不伴草人」は、1936年「鐘路の鮮人街三越以上といわれる和信デパート」を目を皿のようにして見たものの、セルロイド製の新玩以外は、「微塵も姿を表さず」、日本人の百貨店三越、丁子屋、三中井と本町にある土産物店「海市」で極わずか、木靴、洗濯棒（砧）、太鼓、瓢瓜<sup>ハクワ</sup>の仮面が陳列されていたとしている（『土偶』2-1・1936.3:5）<sup>(3)</sup>。このことから、郷土玩具は、日本人向けのお土産品であったことがわかる。しかし、1939年、清永を頼って渡朝した九州の玩具蒐集家川辺正巳の時代や朝鮮在住の河内山豊が訪れた1940年になると、海市や朝鮮館、三越の朝鮮物産部ではほとんどの鮮玩が出揃うようになっていたことがうかがえる（『土偶志』5-1・1939.5、6-1・1940.3:3）。

もうひとつの入手先は、東大門付近に立つ市や露店である。4月8日の灌仏会の際には、寺院の出店などで、「鸞」といわれる日本の鳩笛に似た張り子（古いものは素麵粉）や鶴などの人形、陶磁器の「貯金玉」が購入できたという記述もある（『土偶』2-1・1936.3、2-5・1936.12、武井1930）。上述の「兀童起」も出店で販売されていたもののひとつであるが、1895年にアメリカで出版された Korean Games に紹介されており、19世紀末には存在していたという（畑山2003）。しかし、釜山の清永完治たちが蒐集していた1930年代にはすでにそのような風景は過去のものとなっていたらしい。また、同じく釜山玩具同好会の古原憲太郎が、1935年、瓢瓜（<sup>パガヂ</sup> 韓国の瓢箪）で作成した「化面」を京城の店舗で購入したとある。これらは、村祭で使用される仮面で、19世紀後半に作成されたものとされている（『土偶』1-4・1935.12）。古原は、のちにウサギの毛で髭や眉をあしらった張子の仮面も発見している。また、江原道の東海岸洞祭（村祭）で使用していた「獅子戯面」（<sup>サジャノリ</sup>）を1938年11月に同好会の仁科十朗から清永は入手している。パガジの仮面は、上述の尾崎の図譜（1934）でも登場し、広義の「郷土玩具」として趣味家たちの蒐集品となっていた。これらが実際洞祭で使用されていた実物なのかは不明だが、現在、天理参考館にも、戦前に蒐集された李朝時代のもとのされる洗練された上質な仮面があり、当時、古いものが流出していた可能性はある。いずれにせよ、玩具類は同好会の拠点である釜山では当初見当たらず、京城に集中していた。

一方、清永たちのように現地在住者や旅行者は、京城などを隈なく探して玩具類を入手したが、祐生のように日本にいる者も、趣味仲間の恩恵によって、「外地」や未踏の地域の玩具、風景を身近にすることができた。趣味家たちは、新種のを発見した際、可能であれば複数購入し、同人に贈呈したり、有料で頒布したりするのが常であった。

## 4. 趣味家と植民地

### 1) 趣味家集団

それでは、趣味家たちはどのようなネットワークを展開していたのだろうか。趣味家たちにはいくつものグループがあり、個人は大概複数の会に属していた。そして、その交叉したネットワークが植民地の風景を伝達する役割を自然に担う結果にもなっていた。例えば、本稿の中心的事例である板祐生は、現在わかっただけで、戦前の主たるものでも10の会に所属している。以下では、祐生を事例にそのグループと植民地との関係を概観してみる。

最初に参加したのは、趣味界でも有名な三田平凡児主催「我楽他宗」（1919年創設）である。山口（2001）も詳しく言及しているため簡単に述べるが、ここには上述の有坂與太郎ほか、中国・満州玩具の第一人者で大連在住の須知善一、のち祐生のもとや朝鮮、満州へも訪問するシカゴ大学のフレデリック・スタールなどもメンバーであった。また、京都の田中緑江主催「郷土趣味」（1918-1925）の会員ともなる。斉藤昌三、川崎巨泉、尾崎清次、杉浦丘園、木戸忠太

郎など各地の著名な蒐集家が加入している会であり、民俗学者の折口信夫、中山太郎、南方熊楠なども執筆している。やはり我楽他の同人でもあった吉田永光主催、郷土玩具の頒布会「童楽会」（1925年入会）、名古屋の浜島静波主宰「多納趣味」（1927-1933）、松田昇太郎等が主宰した「自刻自刷」といわれ自ら作製した版画（葉書）の交換会「好刻会」（1930）、武井武雄の「榛の会」（1935年）もあった。後者は棟方志功、平塚運一、料治朝鳴、川上澄夫など著名な版画家たちや釜山の清永完治も同人であった。その釜山玩具同好会（1935）、また1920年、最初の国勢調査の記念葉書交換会などもあった。大連在住者が中心となった手ぬぐい頒布会「美蘇芽会」にも所属していた。ここからは、朝鮮の將軍標が染められた手ぬぐいも会員に頒布されている（『土偶志』5-1・1939.5：8-9）。大阪の「護美会」という人形頒布会にもいた。

これら趣味家集団は、趣味に関する通信、同人誌を発行していることが一般的で、その会誌を通して他の趣味家たちとの情報交換や交流を活発にしていた。会には、会員として所属している場合と、各会が頒布する趣味品や私家本を申請、入手し、投稿などをしてそのネットワークに参入する場合があった。大阪の「吾八」「だるまや」など趣味の店にも置かれ、あるいは、ここから出されるカタログから情報を知ったものが主催者へ申し込めば、部数に余裕があれば実費と送料で会誌を入手することも可能であった。名刺代わりに先輩趣味家に贈呈することも珍しくない。印刷所で印刷、出版社から発行されることもあったが、私家本も多い。

会員数は、さまざまであるが、田中緑紅の「郷土趣味」は、1924年現在の名簿で、会員186人とある。田中も属していた「我楽他宗」は、最初は西国33ヶ所にちなんで、33人としていたが、のちに希望者が増加し、1925年通信「我楽他宗シンブン」には主催平凡児の独断で、330人、外国人99人にしたという記述もある。後年の代表的玩具集団日本郷土玩具協会（1937年発足）は、1943年には240人を超えている。手作り通信誌は、発行時期はアトランダムで、部数も1回30～50部が平均的だが、個人の能力によっても異なっていた。定期刊物物といっても主催者次第で、フレキシブルに発行されていた。祐生自身は、1921年『おもちゃと絵馬』を初めとし、戦前までに11種の私家本を出している。代表的通信誌『富士乃屋草紙』は1925（大正14）～1934（昭和9）年までに全39冊出されている。また、数種の雑誌が同時並行に発行されることもあり、雑誌づくりは本業をも侵食し、祐生などは解雇される原因ともなった。通信にはまた、同人が主催する別の会の入会案内なども掲載され、趣味家たちは、無限大に、そして、比較的自由にそのネットワークを拡大していったのである。

したがって、趣味家集団の数を把握するというのは、不可能に等しいが、趣味家の会は、何人かはその成員が重なっていることも珍しくなく、趣味人同士は直接、間接的知人であることが多い。例えば、のちに文化人類学の博物館の礎となる渋沢敬三のアチック・ミュージアムも、初期は郷土玩具蒐集から始まっている。そのなかで蒐集に参加していたのが、有坂興太郎であり、榛の会の武井武雄であった。アチックの玩具収集の活動時期が大正末から1928（昭和3）年頃がピークという（宇治2001：10-11）。当時の流行がさまざまな人に影響を及ぼしていたこ

とがわかる。

(大正期に趣味家の層は拡大していくといわれるが)、そのなかで徐々に棲み分けも進行していく。柳田國男も初期は集古会に参加し、のちに「民俗学」を形成していったことは良く知られている。また、柳宗悦の民芸も同時代に活動し、祐生の近辺には、その中心的メンバーでもあった鳥取市の吉田彰也がいた。祐生は吉田が中国滞在中(1938~1945)、その工房の職人を訪ねている。美しいものに関心をもつ彼にとって民芸の活動も無視しえないものであったことは推測できるが、彼が民芸の品物を蒐集することはなかった。また、戦前において祐生が彼と交流した形跡もない。民具学や民俗学、民芸の各分野に分化していく人々の集団は、郷土玩具の趣味家たちとはまた異なる「趣味」の人々であった。民具学が民俗学より「科学性」をもとめ、民芸運動家たちはより生活システムのなかでの美を求めたという(吉田憲司2005)。一方、民芸家たちは、職人が作り出した庶民の道具を洗練された「美的」な存在として昇華させた「運動」であったのに対し、愛玩家たちに代表される趣味家たちは、人形への愛着や郷愁といったより情緒的な感情を重視し、彼らの同人誌によく表れる「童心」を重視する存在でもあった。趣味家集団の名称が「我楽他」や「童楽」といった、無用の長物を示唆するものが多いのは、彼らの自己認識を象徴している。彼らのなかに、教師や小児科医、児童文学者など子どもに関連する職の人も多いが、ここで重要なことは、手軽で気楽な蒐集趣味は、他の集団よりも階層的にも、知的好奇心においてもその層は多様化し、より一般人を多く内包していった点である。

また、趣味家は東京、大阪などの大都市の住人が多数をしめていたようであるが、板祐生(鳥取県)をはじめ、九州の梅林新市、高山重城、川辺正巳、新潟の川口栄三、福島県の富士崎放江など地方にも錚々たる趣味人が存在していた。そして、植民地には、以下に詳述する朝鮮の清永完治をはじめ、満州玩具同好会の須知善一、台湾関連には立花壽など、各地の著名人が存在していた。ただ重要なことは、例えば須知善一なども満州玩具を目指した人ではなく、趣味家としてのスタートは日本であり、多くの人が移住という私的理由によって、移動するプロセスのなかで植民地コレクションの提供者となるのである。趣味家の私家本には、たびたびこれらの人々の移動の連絡、旅行の報告などが記されている。また、郷土趣味の会員でもある満鉄職員で社長秘書を長年務めた上田恭輔は、三田平凡寺とも関連があり、我楽他の通信にも登場する<sup>(4)</sup>。ただし、女性は稀で、植民地に関しては、現地の人が含まれていないのが特徴でもある。

## 2) 釜山玩具同好会

では、植民地の趣味家たちはどのような人々で、どのような活動をしていたのであろうか。特に朝鮮半島の玩具収集家の会、釜山玩具同好会を中心に整理してみる。

会誌『土偶志』は第7期まで全20冊(1935~1941)ある。第1期3号(1935年10月)には、

当時の同好会メンバーが記されており、この号以外、正式な会員名簿が掲載されている号はない。初期のメンバーは清永ほか、石橋英雄、片岡文雄、竹村清、古原憲太郎、三代忠雄、満田嘉高、波多野長政の8人で、京城の波多野以外、すべて釜山居住者であった。

まず、主催者の清永完治（1896～1971）は、下関出身の商社マンで、開化期の代表的在朝日本人、廻船問屋も営んだ釜山の太池忠助の娘婿となった人物である。仙台や神戸で勤務したのち、1931年義父の要請で渡朝し、農業機器や焼玉エンジンの販売を任されながら、終戦まで釜山の土城町や大倉町に居住していた。したがって、同好会を結成し会誌を発行するのは、渡朝後4年ほどのちになるが、玩具趣味は仙台の頃から始まり、馬の蒐集が発端であるため、自らを木馬洞とも名乗っていた。同人の片岡文雄、古原憲太郎は釜山第2尋常小学校の教員である。片岡は熊本県出身で、1928年から41年まで、同校に勤務していた<sup>(5)</sup>。古原は1935年より在職し、片岡の年下の同僚である。清永に紹介され送付した板祐生への手紙によれば、移民2世で、片岡の勧誘を受け同好会に参加している。当初はさほど興味がなかったのが、片岡の手伝いをするうちに玩具に目覚めたという。竹村清も釜山第8尋常小学校の教員で、古原と同時に入会し、『土偶』2号（1935年9月号）で紹介されている。洋画協会の同人であり、俳人としても知られた趣味家であった。片岡や古原同様、以下にのべる玩具制作を学校において指導していたようで、第8小の玩具は学校方面では有名であったという（『土偶』1-2・1935.9）。また、祐生宛の葉書によれば、同じく第6小学校教員半田一夫も、彼らと2、3カ月おくれて加入している。ただし、1937年度には転出し、他校で校長となったためか、投稿はなく目立った活動はしていない。波多野長政は、商店の支配人であったが、第1期3号（1935年10月）が発行される頃には、京城の支店に転勤となり会の活動からは若干後退したようだが、京城におけるその後の鮮玩発見に貢献してもいる。石橋英雄は、石橋猗竹ともいい、印相研究家で、成功堂という判子屋兼印刷会社を営み、大倉町では清永と2、3軒おいた隣人であった。現在の龍頭山公園の南側で中央洞から南浦洞にあたる大倉町は、釜山のなかでは中心的な商店街であった。あとの満田嘉高に関しては栄町居住ということ以外は不明で、教員と思われる三代忠雄に関しては徳島出身であることのみわかっている。

名簿には載っていないが、常連の投稿者である仁志定治は、職業は不明であるが、釜山本町二丁目居住で「藁人形」を発見して同人たちに配布した人物である。同じく保田素一郎は、清永とともに朝鮮において、早期から有坂による「日本郷土玩具協会」会員となっている。「朝鮮の郷土玩具」を釜山放送で清永に発表させたラジオ放送局の社員である。有坂の会には、1940年には全州居住でやはり教師である河内山豊と瓜生二成が入会し（『鯛車』36・1940.12）、『土偶志』にも執筆している。ちなみに、「外地」で日本郷土玩具協会会員が多いのは、台湾で最多の1941年当時で16人、中国大陸は須知を筆頭にほぼ4、5人である。

釜山玩具同好会では、祐生のように清永の存在を知り、その会員数や投稿者は増加する。最初の会誌は25部であったが、最終号では75部となっている。清永自身、玩具界のなかでは鮮玩

の第一人者として認識され、同誌への投稿者、執筆者は玩具会の有名人が大半を占めている。清永が下関出身のためか、梅林新市、梅原與惣次、祖父江梧楼など土偶の執筆者には九州人や西日本居住者が多い。久留米の内科医である小野正男もその一人である。また、鹿児島島の川辺正巳も同様であり、先述の満州玩具の第一人者須知善一も主要な投稿者である。清永は同じ外地移住者ということもあったのであろうか、須知とも親しく、1948年に須知が京都へ引き揚げてきたあともしばらく、文通を行っている。彼らは、いずれも板祐生の私家本の常連でもある。いずれにせよ会員は教員が半数を占めており、彼らは特に後述する創生玩具作成の主導者となっていた。

### 3) 創生玩具

釜山玩具同好会の趣味家たちは、玩具を購入するだけでなく作成、あるいはその指導もしていた。「内地」においては、大正末ごろから山本鼎による農民美術運動が発端となり、農家の副収入として、風土の特徴を醸し出す工芸や土産物の作成が農林省や官庁の支援もあり活発となる。植民地においても、人形以外に、台湾の少数民族の織物や朝鮮では李朝家具もその対象となっていた。「考現学」の提唱者として知られる今和次郎は、朝鮮を視察し、日用品、特に女性の空間のなかに優れた工芸品が存在していることを指摘している。刺繍のほどこされた服飾品、砵や厨房の道具、多様な甕類が工芸としての可能性をもっていることを指摘しているが、一方で新しい製品の流入によってこれらのものが喪失していく危機感を示し、「農民全体の疲弊を考えると、確実な副業の施設は急務であると叫ばなければならない」と説いている（今1925：22-27）。詳しいその後の展開については、不明であるが、朝鮮では、1926年には、全羅南道の求禮で「農民芸術会」の創立総会が開催されており、1934年の東亜日報の記事（5月2日）にも副業のための郷土玩具奨励といったことが掲載され<sup>(6)</sup>、日本より若干遅れた形で、類似の指導が展開していったことがわかる。しかし、農民美術で創作された特に玩具は、指導者が少数で各地の個性がないとされ、日本においては有坂與太郎によって「創生玩具」とよばれる新しい郷土玩具の制作活動も進められていく。また、官では農家の副業として農民美術運動は推奨されたが、趣味家たちは「古玩」のみの蒐集では、将来的に郷土玩具の制作者が途絶え、郷土玩具自体がいずれ消滅するという危機感から、創生玩具を支援する。伝統という静態的なイメージをもたれる「郷土玩具」と「創生玩具」という一見矛盾する両者の関係は、趣味家の利害と一致することで、彼らの重要な活動のひとつともなっていく。「郷土」らしさに、必ずしも「本物」、歴史的起源を求めなかった玩具愛好家たちから、民俗学が袂を分かつ所以でもあった（香川2003）。清永完治は有坂の「日本郷土玩具協会」の朝鮮支部長となっており、創生玩具の考え方に少なからず影響を受けていたと思われる。釜山では、同好会の同人、片岡文雄や古原憲太郎の指導のもと、尋常小学校で作成された作品は市場にも出されていた。特に片岡は職業科の学生の訓練の一環であるとし、「將軍面」という張子の面や土鈴、「朝鮮風俗壁

掛け」を草案、売り出していた。「祐生」に保存されている土産品は、その一部と思われる。

また、石橋猗竹は1935年頃より「旅とスタンプ社」の経営者となり、スタンプ流行の時流にのり、大繁盛でもあった。この頃、「名所スタンプ」が内地では流行していたらしく、大阪毎日新聞が主催した「朝鮮八景八勝」のスタンプ図案コンテストに同社案が入選し、スタンプ一枚35銭で同人たちに頒布されていた。スタンプは、その後各駅、郵便局、観光名所で押印できるようになり、観光風物のひとつになっていくのは、内地と同様であった。「旅とスタンプ社」の趣旨事業として、「趣味の旅行会開催」、「スタンプ観賞展覧会」、「各種スタンプ集刊行」、「釜山第二小学校職業科創生みやげ品の頒布」、「名勝記念スタンプ作製」などを上げており<sup>(7)</sup>、本土の趣味家たちが子ども文化の創造や流行の演出に大きく関与していたように（神野1993）、朝鮮のなかでも観光事業と趣味家たちが結びついていたことがわかる。また、小学校における職業科の設置は、内地とは異なる朝鮮独特の措置である（稲葉2005：52）。しかし、日本の農民芸術とはことなり、朝鮮では農村に先駆け、特に都市の日本人学校で担われるもので、商業者が多い在朝日本人の師弟の将来に配慮したものであった。古原憲太郎や小学生によって作製された仮面の模造品は、現在「祐生」にも保存されている。片岡が作成した「將軍面」は福岡郷土玩具研究会主催の玉屋デパート展示即売会にも出品され好評を博した（『土偶』2-1・1936.3：6）。また、職業科の制作が主なものではなく、朝鮮人の制作者がいた。朝鮮の指貫に顔を描いてチョゴリを着せた「コラム（指貫）人形」（朝鮮版姉様人形）も、『土偶志』の投稿者で、造型美術の研究者仁科十朗の弟子、「良家の子女」である金尚子によって提案製品化されたものとされる（『土偶志』4-3・1938.12）。

先述の玩具図譜の系譜とあわせて考えてみると、朝鮮玩具は1920年代初めには素麺粉などによる既存の兀童起や鸞類が衰退し、あるいは一時忘れられていたのが、観光客の増加や農民芸術運動、清永完治たちの影響のため、創生玩具類と徐々に入れ替わり、1930年代後半以降、とくに1940年代に入って再び市場に出回るようになってきたのではないと思われる。生産量が増加したかは、清永たちの入手までの悪戦苦闘ぶりや、中国玩具と比較すると疑問であるが、尾崎や武井のようなパイオニアの時代とは異なり、玩具界のなかで直接愛好家たちが入手できる契機が清永たちによって増していったと考えられる。1943年の時点では、釜山府大倉町に朝鮮玩具販売者「山崎名産本舗」などもできている（金井1943：99）

## 5. 趣味家たちの通信

### 1) 視覚メディアとしての版画・絵

ところで、玩具人たちには、「玩人文化」ともいえる共通した特徴があった。ひとつは、頻繁に通信を往来させていたということである。前述のような同人誌をこまめに作成、配布する一方、同人やその周辺の人々はまたその情報や文章に随時反応、投稿したり、私的な書簡での

やりとりもしていた。その関係は、互いを「玩兄」、「玩友」と呼び合い、誌面でしか知らないあこがれの「玩兄」のもとに、仕事や旅の途中でわざわざ立ち寄り、玩具談義に花をさかせるということも珍しくはなかった。従軍中の小野正男が清永や須知を訪問するのは、その極端な例である。また、筆者が出会った趣味家の遺品には、玩友訪問時の挿絵付の詳細な旅日記が残されていて、筆まめで記録好きな彼らの特徴でもある。

2つ目は、学校の間借りであった祐生宅には無造作に蒐集品が積み上げられていたというが、清永も、また、だるま蒐集で有名な祖父江梧楼なども、壁一面に棚を設え、無数の玩具を並べるという共通した陳列法があった。小野正男は、北支から上海移動中須知善一を訪問した際、「6帖の玩具室の壁という壁、棚という棚にずらりと整理して飾ってある数千の満州や支那の玩具」（『土偶志』4-1・1938.2：9）に驚嘆したとある。このような玩人文化は、やはり玩具人同士の通信や交流によって自然に伝搬されていったものと思われる。

3つめは、版画や絵の心得があるということである。3章で紹介した朝鮮玩具集の著者の多くが版画家ではあるが、医者であった尾崎清次も自刻自刷で図譜を作成している。版画は、当時の趣味家たちのたしなみのひとつでもあったことが、彼らのなかで交換される通信や葉書類にうかがわれる。板祐生は、『土偶志』の第2期以降、表紙の版画を度々引き受けているが、主宰の清永も板のような入選の常連ではなかったが、武井武雄の「榛の会」のメンバーでもあった。また、朝鮮で『朱美之集』という版画同人誌を発行しており、釜山郷土玩具同好会の同人、半田一夫や寄稿の常連、川辺正巳（銀行員）、守洞春（呉服店勤務）、梅原新市（百貨店勤務）、小野正男もメンバーであった（畑山2002：89参照）。鹿児島の川辺は、清永に勧められ、版画を始めたとも述べている。『土偶志』においては、多くの玩具は写真で紹介され、文は活版印刷であるが、中には自作のものや祐生作ほか、複数の趣味家から版画の挿絵も提供されている。謄写版を使用した孔版画家として有名な板祐生の私家本は、ほとんどが色刷りで、白黒写真より鮮やかな『愛玩人』や『富士乃屋草紙』は、玩具界でも定評があった。このように同人誌は、ビジュアルに植民地の玩具や風景を伝えてもいた。外地に暮らす趣味家は、朝鮮の両班（李朝の官僚やその末裔）や時には昔話を版画にして、年賀状などで仲間へ送付している。大陸のイメージは、趣味家のネットワークではあつという間に広がり、1926年（大正15）年、寅年に祐生に送られた年賀状は、「支那玩具の虎玩」、「朝鮮麻浦土虎」、「朝鮮兀然童の虎」「満州虎まくら」「天津布老虎」など外地の虎玩具を主題とした賀状のオンパレードだった。11種類くらいの虎の中で植民地のものは4種類、更に一回り過ぎた1938年には24種類のうち13種類が、中国、朝鮮、台湾のものである。祐生によれば、このような「外地」の虎が寅年のモチーフとして送られることは、前前の寅年、つまり1914年にはなかったことだという（『土偶志』4-1・1938.2：6-8）。朝鮮併合（1910）から時間的に経過し、満州への往来も定着、日中戦争へ突入し、趣味家たちの意識のなかには、虎といえば植民地を条件反射的に思いつくそんな環境が出来上がっていたということであろう。ある種のオリエンタリズム的なまなざしが作られつつ

あったともいえるが、後年の絵葉書を見ると、「虎玩」の地域がきわめて多様化していることに気づく。人気があったとはいえ、これらの品は商人が集めたものではない。祐生の帝国コレクションが、周辺の地域住民からの送付品であることは先に述べたが、九州の梅林新市による『南満州玩具集』は、満州居住の親族から送付された玩具を版画にした作品集であるという（ご子息談）。山内神斧の外国玩具も従軍者や周辺の旅行者からの贈り物や町にあったアフリカの玩具をスケッチしたものでもある。まさに、これらは趣味家やその周囲の人々の移動の軌跡の反映であり、日本人が大陸の新たな地域へ入り込んでいたことの象徴でもある。

また、趣味家たちの間では玩具絵葉書も作成されていた。奈良の九十九豊勝の東洋博物館発行『土俗と伝説』、西澤笛畝の西澤玩具研究所からは『日満人形玩具集』（1941）、名古屋の趣味家濱島静波（名古屋放送局勤務）による『土俗玩具絵葉書』など、いずれも1940年ごろのものであるが、満州や台湾などの「郷土玩具」を紹介した絵葉書セットである。

## 2) 言説としての朝鮮・中国

それでは、趣味家たちの中で往来していた通信のなかで、植民地はどのように記述されていたのであろうか。『土偶志』や度々朝鮮の情報が掲載されている板祐生の『愛玩人』を事例に考察してみる。

釜山玩具同好会の『土偶志』は、必ずしも朝鮮玩具のみを扱った雑誌ではない。清永の序文によれば同好会は朝鮮での玩具発掘や普及を念頭においたものとされるが、会員の目標とする蒐集品も内地の人形が主流で、掲載品も本土のものがむしろ多い。また、須知の参加により満州玩具の記事も度々掲載されている。しかし、趣味家各人にとっては、内地も外地も特段差異のあるものではないかのようである。もの珍しい他郷という点では共通していたのだろう。この傾向は、清永完治から送付された朝鮮玩具を紹介する板祐生の私家本にもみられる。『愛玩人』（創刊号）の配列は、「肥後の牛乗り天神」、「久留米の皿山人形」「下関の帝祭の土鈴」に続けて、「朝鮮の洗濯棒と木靴」が紹介され、再び「宇土女達磨」「久留米の押し絵細工」、次に「朝鮮古面」と、特に朝鮮と内地といった区別なく、各地の玩具を鑑賞するという形で綴られている。

玩具はほとんどが豪華な孔版画摺り、つまりカラー版挿絵付きで、そこには解説が一つ一つ施されている。寸法や色合い、材料が示され、古面などは、装着の際には後ろに袋を縫いつけて被るのであるとか、根拠は薄いが大門の中に魔除けとしてつるしたものを役者がはずして使ったなど、様々な逸話も付加される。以下は、清永から送付された砧の玩具についての一文である。

……ぼつぼつとこの山陰への朝鮮半島の暖かい風が朝鮮の匂いを吹き送ってくれるうれしさ。  
朝鮮風俗絵葉書一枚には、きっと川辺、洗濯棒をふり上げてゐる彼女の姿をうつしてゐる。その

棒も一度見たことがあるが、実に単々朴々たるものに外ならない。だが玩具の砧は然らず。〈中略〉 紅、朱、緑、碧、黄、白、褐、金、の各色をして松樹下の虎が描かれ、この小さい木片が偉大な働き振りを見せて呉れてゐる。これ許りは、洗面作ってその濃褐色の刺激を受くる福神や天下大將軍の様な褐色がなくてもよろしい。木靴も五彩色燦として彩られてゐる可愛いものである。

朝鮮に関する絵葉書は、知人たちによって明治末から彼のもとに送られていて、その風景と玩具を見比べている。実物もみたことがあるというから、ほとんど旅行をしなかったといわれる山間部の趣味家にも、何某かの形で朝鮮の品物が目に入っていたことがわかる。また、柳宗悦たちによって紹介される白磁や李朝家具といった静的な民芸とは異なる鮮やかな文化があることを趣味家たちは当時すでに知っている。また、より理想の「郷土玩具」を求めて玩具に対する寸評が加えられるのも常であった。

一方で、『土偶志』には、朝鮮に関する記事も連載されていた。清永完治による「鮮玩閑話」は、第2期1号(1936年3月)から最終号第7期2号(1942年8月)まで全13回、片岡文雄による「朝鮮の年中行事」が第2期2号(1936年5月)から3回連載(1937年2月)されている。ただし、後者は未完である。「鮮玩閑話」は、毎回2、3種類の朝鮮玩具が取り上げられ、詳しい由来や民俗が語られ、本格的な鮮玩入門の解説となっている。それらの玩具も写真や板祐生の版画でビジュアルに紹介される。初期の尾崎清次や武井武雄の書籍と比べ断とつに、また、のちの『乃留毛隨攷』(1943)では更に朝鮮玩具への知識が深まっていることがわかる。現地居住者という強みでもあるが、植民地居住者は、須知善一も同様であるが、その土地の文化の紹介にも努めていた。これは、各地の郷土玩具の通信誌が、自分の郷土を連載で解説するということが見られないことと対照的である。

朝鮮への認識は、投稿者のなかでも多少変化がみられる。武井武雄は儒教の物質文化軽視と李朝、特に11代王、燕山君の悪政による経済低迷が、庶民文化を衰退させ、朝鮮で玩具が少ない理由とした(1930)。その後拙健之助などもこの説を反復しているが、日本において一般的に流布していた言説でもある。一方、西沢笛畝は、「朝鮮の玩具と人形を探る」(『土偶志』3-3・1937.11)で、次のように書いている。

朝鮮には人形玩具の優れたものがないのではなくって、一種の習俗から作らない。それが為に発達しなかったという方が本当だと思われる。朝鮮では人形を信仰の用具として、これを忌み嫌ふ習慣になっている。(中略) 今迄は作っても買手がないので、自然敬遠され勝ちになっている。

京城に旅行した際の見聞をもとにしているようで、西澤がわざわざ上記のようなことを述べているのは、郷土玩具の有無がその文化の水準を表すというのが玩具人の前提となっているためである。哲学や精神文化を重んじ、趣味家たちのような物質文化にこだわる存在は軽視され

るということを当時の日本人たちが理解していたかは疑問である。いずれにせよ西沢や清永完治のように、玩具を通してそれにかかわる文化を理解、あるいは解説しようという人は希であった。人形に関しては「独特な色彩」「鮮玩らしい」といった抽象的言葉で、只々そのユニークさや「郷玩らしさ」を観賞、賞賛しあうというのが、多くの趣味家たちの反応であった。

私家本には玩具は紹介されているが、玩具が存在する彼の地の人間を想起させる厚い記述はあまりない。朝鮮の場合、当時の日本人と朝鮮人の実生活における生活空間の乖離という物理的限界ともいえるが、柳宗悦との対比をみても、郷土玩具愛好家に共通してみられる傾向でもある。「私の愛玩心は一にこの童玩溢るる童心の醍醐味にあこがれることである。そうして、童心のむかしの幼な心を、今の濁れた魂の底からよび起こすべく願うことのそれのみである」と板が記述しているように、玩具愛好は、「世のさまに疲れた魂」を癒す、現実逃避的手段でもあった（『愛玩人』創刊号・1936.3）。それは、都市的喧騒に対する癒しを求め、「郷土研究」や「郷土玩具」につながる「郷土」という新たな感性を生み出した（香川2003：121）時代の潮流ともつながっている。

その傾向は、戦場においてよりその傾向を顕著にする。『土偶志』が発刊され、2年後には盧溝橋事件、日中戦争がおり、玩具の世界にも戦況がちらつき出す。久留米の内科医小野正男は、盧溝橋事件の翌月、37年の8月に陸軍衛生部見習士官として「北支」戦線へ派遣される。その後、上海、中支、満州と各戦線を転々とし、2年半後に兵役をとかれ帰国する。その間の中国大陆における玩具状況と戦線の様子を彼は、「陣中玩具便り」として『土偶志』4-1（1938年）以来、1940年（7-1）まで6回にわたり連載し、のちに有坂與太郎監修の民族玩具叢書第7巻に『戦線玩具報告』（1943）として改訂版を出版している。そのなかには、戦火のなかで「玩具漁り」をする自らの姿を描いている。

皇軍が悪戦苦闘した上海へ上陸後、常熟、常州、丹陽と進軍しましたが、上海戦線はどの部落も、どの都市も戦禍を受け、住民といたら数人の老人しかいない様な、廃墟と化していました。私はこの破壊され尽くした民家から一つ二つと人形を<sup>あつ</sup>蒐めています。私はどの位慰められ、又心から楽しんでいるか判りません。（『土偶志』4-1・1938.2：9）

無惨にも取壊された家具什器、泥靴で踏みにぢられ、放り出された衣服や布団の間に踏み越えながら、裏庭に出て私は、寝台下に転がっている玩具の麒麟を発見した。（『土偶志』5-1・1939.5）

戦争のさなか、焼け跡の民家から玩具を蒐集するというのも無神経であるが、時には、伝染病棟として使われていた民家の片隅にある手製の布製玩具を見出し喜びを隠せないという様子も綴られている（小野1943：9-10）。「二千の傷病兵を送り出し」、「私は死の町のような光州城内を見学して歩いた」「光州城内の友軍は悪戦苦闘を続けたことが偲ばれた」とか、「激越な抗

日スローガンを飽き飽きする程見ました。」など、端々に過激な戦況が描かれているが、彼の視線はひたすら玩具にあった。検閲も入っていた雑誌ではあり、戦争という異常事態のなかではむしろ自然な反応であるかもしれないが、「趣味家が見ていたのは現実の光景では」なく、「彼らの旅の目的は旅の経験そのものではなく、あくまで郷土玩具を入手することにあった」（香川2003：122）という蒐集旅行に赴く趣味家の姿と重なるところがある。しかし、当人の意図とはかかわりなく、戦場の様子は通信をとおして日本の同人たちに知らされてもいた。

そのほか、『土偶志』では、川辺正巳が「鮮満北支行」を第4期2号（1938年12月）から5回にわたって連載し、「玩友」清永完治や須知善一を訪ね、玩具蒐集や金剛山などの観光地への旅日記を詳しくつづっている。同じく福岡居住の淵上正月は、のちに出征し、小野に引き続き従軍日記兼、中国における玩具探索記を連載している。いずれも、人間との交流を描いたものはほとんどない。

### 3) 世界から東亜へ

現実の風景を見ない、童心をもって、只ひたすら玩具を眺めるという愛玩人たちは、第2次大戦へ突入するなか、突然、郷土玩具を民族の歴史として認識し、蒐集を意味ある自覚的行為に変換することを求められる。有坂與太郎は、これまでの日本郷土玩具協会を1942（昭和17）年、日本民族玩具協会に、「郷土玩具」を「民族玩具」と改称し、上述の『民族玩具叢書』全9巻を上梓する。また、西沢笛畝は翌年『大東亜玩具史』を出版している。これらをナショナリズムの昂揚としてだけみるのは安易な解釈のようにも思われる。民俗学との分裂が、あえて歴史に固執する玩具の位置づけに異を唱えるものであったとすると（香川2003）、後年の変化は大転向ともいえる。有坂は上記の第1巻で世界における日本の道義を述べ、民族玩具と称することは偶然や場当たりではないとしながら、あまり説得力のある説明はしてはいない（有坂1942：14）。「所謂民族玩具とは、その余りに無力である国民の創造したもので、その大半が旧秩序の破壊を意味する新秩序の建設とは全く縁なき存在で、忌憚なく云へば現在での一般社会から存在の価値を失われつつあるものである。」（上掲書：11）と、その言葉に本音があるようにも思われる。意味のないものを、意味あるものに転換する必要性に迫られてきているということである。同4巻を担当した金井虹二も「遊戯的蒐集から」「学問的はもちろん、総ゆる方法によっておそまき乍らなすべき時が来た」（金井1943：1）と、必要性にかられた大儀名文を並べているようにも思われる。

本稿で、それらを検討する余力はないが、もうひとつ付言するならば、郷土玩具へとつながる「玩具蒐集」は、江戸趣味の延長とのみとらえられることが多いが、西沢笛畝以来の『うなるの友』（1917～1924）や淡島寒月の『おもちゃ百種』（1916）など初期の玩具集をみると、朝鮮だけでなく、アメリカ、ドイツ、ハンガリーなど、後年のものよりはるかに広い世界にその視線は向けられていた。山内神斧の『寿寿』（1914～1935）も、特異な玩具集とはいえ同時代

のものであることは重要である<sup>(8)</sup>。また、初期の趣味家集団「我楽多宗」には、アメリカ人のスタール以外に、インド人やポーランド人も含まれていた。日清・日露戦争に勝利し日本帝国として世界を意識しだした時代背景を考えれば、むしろ当然でもある。玩具蒐集はブリキやセルロイドのおもちゃに対抗したものであったが、それは決して対西欧ではなく、ドイツの土製の猪や安南（現ベトナム）の人形、インドの布製象も「人さまぎまの生まれ故郷風俗」（淡島寒月1916）にある、等しく関心をひく玩具であったのである。後年、敗戦に近づきつつあった日本では、玩具界においても、その視線は世界から東亜へむしろ縮小していったといえる。そして、清永のように徐々に朝鮮を理解しつつあった玩人も、また、趣味家の通信を通して配信された無数の風景も、戦争によって消滅し、今日の韓流を迎えるまで、その民俗は出会ったこともない風景であるかのように、戦後人々の記憶から遠のいてしまったのである。

## 6. おわりに

今日想像する以上に「外地」を含め、植民地の風景は戦前、市井の人々に知られていた。日露戦争後、写真絵葉書が流行し、「風俗絵葉書」によって、植民地の風景が見慣れたものになっていったことはよく知られている。一方、趣味家たちの通信も、植民地の情報を伝える大きな勢力になっていたのではないだろうか。日露戦争以前は従軍画家が一般的で、戦争画を通して人々は外地の様子を知ることにもなった。しかし、趣味家に代表される市井の画家や版画家たちも、私家本や自作の葉書をとおして「外地」の情報を世間に伝達していたのである。

また、版画以外にも絵手紙の習慣もあり、文士のものなどは時折紹介されているが<sup>(9)</sup>、絵を描き、版画を刷るという行為は、戦前のひとつの教養でもあり、趣味家たちをみていると決して特なことでなかったように思われる。また、版画出版社の老舗、京都の芸艸堂には、明治のころより海外を旅した人々の絵日記、漫画集や版画などが残されている<sup>(10)</sup>。それらをみると、フォトジャーナリズムが発達するずっと以前、日清戦争や日露戦争の直後から異国を旅した日本人たちが、絵日記や版画という媒体を通して、その様子を残していたこともわかる。マスメディアとは異なる形で、人々の日常に浸透していく植民地情報としての、これらの視覚資料を分析することも重要である。本稿では、多様な通信誌に登場する内容については、十分検討できなかったが、今後の課題としたい。

〈謝辞〉 本稿は、文部科学省科学研究費（萌芽的研究）平成17年度～平成19年度〔課題番号：17650279〕「日本帝国時代の山陰住民の大陸観・板祐生コレクションと半島移民の世界観分析を中心に」、および仏教大学特別研究費（平成18年度）の成果の一部である。

本稿作成にあたっては、鳥取県「祐生出合いの館」をはじめ日本郷土玩具博物館、芸艸堂、清永博介氏、梅林留巳也氏ほか、注(1)に列記した多くの博物館、資料館から貴重な資料を閲

覧およびお貸しいただいた。御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 筆者は、これまで「祐生出会いの館」(以下「祐生」とする)のほか、川口栄三コレクション所蔵の「日本郷土玩具博物館」、尾崎清次氏の遺品が寄贈されている「日本玩具博物館」、大阪の岸田五兵衛氏の「天理参考館」、鹿児島県の川辺正巳コレクションがある「黎明館」、京都府立資料館、九州のコレクター梅林新市氏、釜山玩具同好会の清永完治氏、および京都の趣味家の先駆者杉浦丘園氏の遺族等をお訪ねした。文献に関しては、黎明館、日本郷土玩具博物館が群を抜いているが、多くは玩具関連など、部分的収集で、趣味家のコレクションが全体的に保存されているのは「祐生」以外ないように思われる。
- (2) 『みつこしタイムズ』第8巻13号 1910年：7、参照。
- (3) 『土偶』は、3-1号より改称し、『土偶志』となる。
- (4) 「我楽他宗宝。我楽他宗の通信のひとつ。1937年10月10日号。『支那風俗叢書』5冊を上田恭輔氏より拝受」とある。
- (5) 『旧植民地人事総覧(朝鮮編)』。以下、教員の在職年度は同書による。
- (6) 日本においては、「農民美術」と呼ばれていたが、朝鮮においては記事でみる限り「農民芸術」という名称が使用されている。以下、朝鮮に関しては後者を使用する。
- (7) 旅とスタンプ社、通信「TABI TO STAMP」臨時号。1935年、11月1日。
- (8) 『壽壽』は、フランス語のおもちゃ JouJou をもじったもの。山内神斧の玩具集で、外国玩具の玩具集。1914～1935年までに、数期に分けて出されている。「ロシア人形と玩具」、「ヨーロッパ人形と玩具」、「チェコスロバキアの人形と玩具」などがある。
- (9) 例えば、小池邦夫編2004『芸術家・文士の絵手紙』二玄社
- (10) 例えば、フランスの万国博覧会へ見学に行く途中、中国や安南の風景をスケッチした米俣田寛『漫遊画集』(1896)や瀬野覚蔵(1922)『覚蔵滞支記念画集』などがある。また、1941年の松田黎光朝鮮風俗木版画には、糸を染める婦人や土間で酒や食事をする男性などこれまでにない人々の生活に密着した版画集などもある。

〔参考文献〕

- 有坂與太郎 1934『玩具叢書 世界玩具史篇』雄山閣  
1942『民族玩具と伝統精神』民俗玩具叢書第1巻 新隆社
- 淡島寒月 1916『おもちゃ百種』
- 井上重義 1988「尾崎清次先生のこと」『おもちゃと遊び』日本玩具博物館報 No.8、p.2
- 板 祐生 1925『柚子は黄ばむ』富士乃屋草紙 第2巻  
1935『青龍』
- 稲葉継雄 2005『旧韓国～植民地朝鮮における「内地人」教育の実証的研究』平成14～16年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)研究成果報告書
- 宇治谷恵 2001「アチック・ミュージアムの郷土玩具」近藤雅樹編 『大正昭和くらしの博物誌』河出書房新社
- 小野正男 1943『戦線玩具報告』民族玩具叢書 第7巻 新龍社
- 小川 都 1997「郷土玩具の基本的性格―百貨店三越を通して―」『京都民俗』15号 pp.27-52
- 尾崎清次 1983『玩具図譜第四巻 朝鮮玩具図譜』村田書店(初版1934)
- 香川雅信 2003「郷土玩具のまなざし―趣味家たちの『郷土』―」『日本民俗学』36、pp.119-126  
2006「<郷土/玩具>考―20世紀初頭における<イノセンス>の発見」『大阪大学日本学報』25 pp.23-40
- 川村 湊 1996『「大東亜民俗学」の虚実』講談社選書メチエ

- 川口栄三 1966 『郷土玩具文献解題』郷土玩具研究シリーズ第1期別冊第3巻 郷土玩具研究会  
郷玩文化研究会 1991 『郷玩文化』Vol. IV No.13, pp. 141-177  
清永完治 1943 『乃留毛隨攷』民族玩具叢書 第9巻 新龍社  
金宗大（南根祐訳）2003 『トケビ 韓国妖怪考』歴博ブックレット24、歴史民俗博物館振興会  
今和次郎 1925 「朝鮮の生活と農工作物」『農民美術』2-2, pp. 22-27  
斉藤良輔 1965 『おもちゃと玩具』未来社  
1971 「日本の郷土玩具-その歩みと系譜」『郷土玩具辞典』東京堂出版、pp. 19-50  
神野由紀 1993 『趣味の誕生 百貨店が作ったテイスト』勁草書房  
鈴木文子 2007 「山陰から見た帝国日本と植民地-板祐生コレクションにみる人の移動と情報ネットワークの分析を中心に-」朝倉敏雄ほか編『グローバル化と韓国社会-その内と外-』  
国立民族学博物館調査報告69 pp. 75-116  
田中梅吉 1926 「朝鮮玩具目録」『民族』第2巻 第1号 pp. 183-196  
鳥取民芸協会編 1998 『吉田璋也-民芸のプロデューサー-』牧野出版  
西澤笛畝 1934 『玩具叢書 世界玩具圖篇』雄山閣  
1943 『大東亜玩具史』大雅堂  
日本図書センター編 1997 『旧植民地人事総覧』（朝鮮編1～8）  
日本民芸協会編 1972 『朝鮮とその芸術 新装・柳宗悦選集4』春秋社  
武井武雄 1930 『日本郷土玩具 西の部』地平社書房  
畑山康幸 2002 「朝鮮・釜山で刊行された『創作版画・朱美之集』-清永完治とその周辺」  
『中国版画研究』4（第4期）pp. 87-98  
2003 『乃留毛隨攷』～朝鮮の郷土玩具を愛した清永完治』『NHK ラジオハングル講座』11  
pp. 94-95  
船健之助 1972 「郷土玩具のなかにある朝鮮文化」『郷玩サロン会報』14号別冊 pp. 1-12  
1992 「朝鮮の玩具」『アジアと日本の玩具』郷土玩具文化研究会 pp. 31-88  
室星哲郎 1985 『版画事典』  
山口昌男 2001 『内田魯庵山脈‘失われた日本人’発掘』昌文社  
吉見俊哉 1992 『博覧会の政治学 まなごしの近代』中公新書  
吉田憲司 2005 「民具と民芸・再考」熊倉功夫、吉田憲司編『柳宗悦と民芸運動』思文閣出版  
料治熊太 1936 『朝鮮土俗玩具集』全国郷土玩具集の16 8月号 白と黒社

●趣味家私家本・同人誌類

- 『愛玩人』板祐生 創刊号 1936. 3～3号 1937. 9  
『うなみの友』清水晴風・西澤笛畝 第1巻 1901.10～第10巻 1923（復刻版 芸艸堂）  
『上方』創刊号 1931. 1～151号 1944. 4（復刻版 1969-1971 新和出版）  
『郷土趣味』1号 1918. 1～56号 1925. 4（復刻版 1984 岩崎美術社）  
『寿寿』山内神斧 1914～1936 全12冊  
『集古会誌』1899～1921  
『鯛車』有坂與太郎 1937.12～1944. 6  
『土偶』清永完治（第1期）2号 1935. 9～第3期1号 1937. 2  
『土偶志』清永完治 第3期2号 1937. 5～第7期1号 1943. 9、『朝鮮の郷土玩具』1939.11別冊  
『富士乃屋草紙』板祐生 創刊号 第39巻  
『みつこしタイムズ』第8巻13号 1910 三越百貨店

（すずき ふみこ 人文学科）

2008年10月14日受理